

■ 第4章 伊勢原市の歴史文化の特徴

本市の概要、歴史的背景、文化財の概要を踏まえた、本市の歴史文化の特徴は、大山を中心とした立地、気候等の恵まれた自然環境を生かした人々の永続的な営みと、それをベースに、宗教的、政治的な働きが重ねられてきたところにあります。その結果として、それぞれの時代に文化が育まれ、定着し、地域の特徴が生じてきたと考えられます。

こうしたことから、本市の歴史文化の特徴について、時代的な側面、文化財が所在する地域的な側面、さらに歴史的なテーマによってまとめると次のようになります。

1 時代的な特徴

(1) 豊かな自然を活かした先史時代の集落群

本市で人が暮らし始めた3万年前から、縄文時代、弥生時代と自然の影響を受けやすい時代の遺跡が数多く発見され、集落が形成されていたことは、人々が生きていくにふさわしい環境がそろっていたことの証でもあります。特に狩猟採集を主としていた縄文時代において、多数の住居が集中する集落が大山を仰ぎ見る高台に展開し、大山山頂からも縄文土器が出土することは、既にこの頃から大山への畏怖と親しみを抱いていたとも考えられ、霊峰大山の始まりと言えます。

(2) 大山の麓に栄えた古代文化

ア 県内一の副葬品が示す古墳時代後期の政治権力

古墳時代には、市内の各地に古墳が築かれますが、それは相応の富の蓄積が前提となり、恵まれた環境を生かした生産力の向上が進んだことを示しています。そして、大山の麓に分布する古墳の特徴としては、相模地域を代表する文物（大刀や馬具等）が副葬されている点です。こうした副葬品は、地域の最高権力者に供えられるステータスシンボルと言え、相模地域の支配者が代々大山の麓に意図的に埋葬されたと考えられます。

イ 宗教拠点の誕生と発達

東国に仏教が伝わる奈良時代には、各地に寺院が開かれていきますが、市内では^{りょうぜんじ}霊山寺（現、宝城坊・716年）、^{せきうんじ}石雲寺（718年）、^{えんぎしきないしゃ}大山寺（755年）が創建と伝えられています。延喜式内社である高部屋神社、比々多神社、阿夫利神社の3座は、遅くとも8世紀前半までには創建されていたと考えられます。こうした社寺も、大山とその麓に点在しており、権力者の墓域から信仰の場へと整えられていたことがわかります。

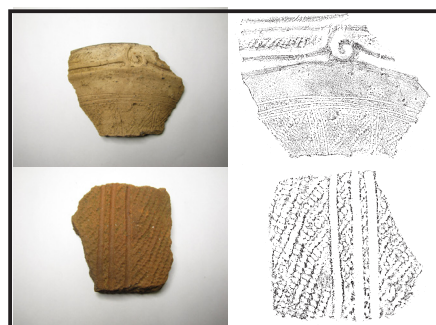


写真 88 大山山頂遺跡出土の縄文土器



写真 89 埴免古墳出土の馬具

靈山寺の薬師三尊像は10世紀頃の作で、平安時代後期以後の関東・東北地方に展開した鈿彫りの最古の作例とみられます。また、この寺の十二神将像（県指定）は12世紀の都ぶりの作品で、靈山寺が都の人からも信仰されていたことがうかがえます。

(3) 大山の麓に展開する中世の武士団

伊豆に拠点を置いた源頼朝は、鎌倉に幕府を開きますが、しばしば伊豆、箱根、県西部に出向きます。日向の靈山寺（現・宝城坊）には、頼朝が1回、頼朝亡き後政子が2回参詣し、現存する鈿彫りの薬師如来に参拝したと思われ、その時代に作られた仏像も少なくありません。市域を本拠地とする御家人として、糟屋氏、岡崎氏、石田氏、善波氏らが幕府を支えました。

鎌倉幕府の滅亡後は、室町幕府と鎌倉府の争いが関東一円に広がりますが、関東管領上杉氏を支える太田道灌が活躍します。太田氏が仕える扇谷上杉氏の本拠が本市にあったことから、糟屋の地は道灌にも馴染みであったと考えられますが、その地で道灌は最期を遂げます。

(4) 大山で花開く江戸文化

江戸幕府を開いた徳川家康が、大山寺の武装勢力を一掃するため、大山寺を純粋な宗教施設として改革していく過程で、御師が誕生します。その御師が大山寺の靈験を広める布教活動を行ったことにより、関東各地に講が組織されていきます。安定した世となり、町人の生活にも余裕が生まれたこととも相まって、大山詣りが大盛況となります。関東

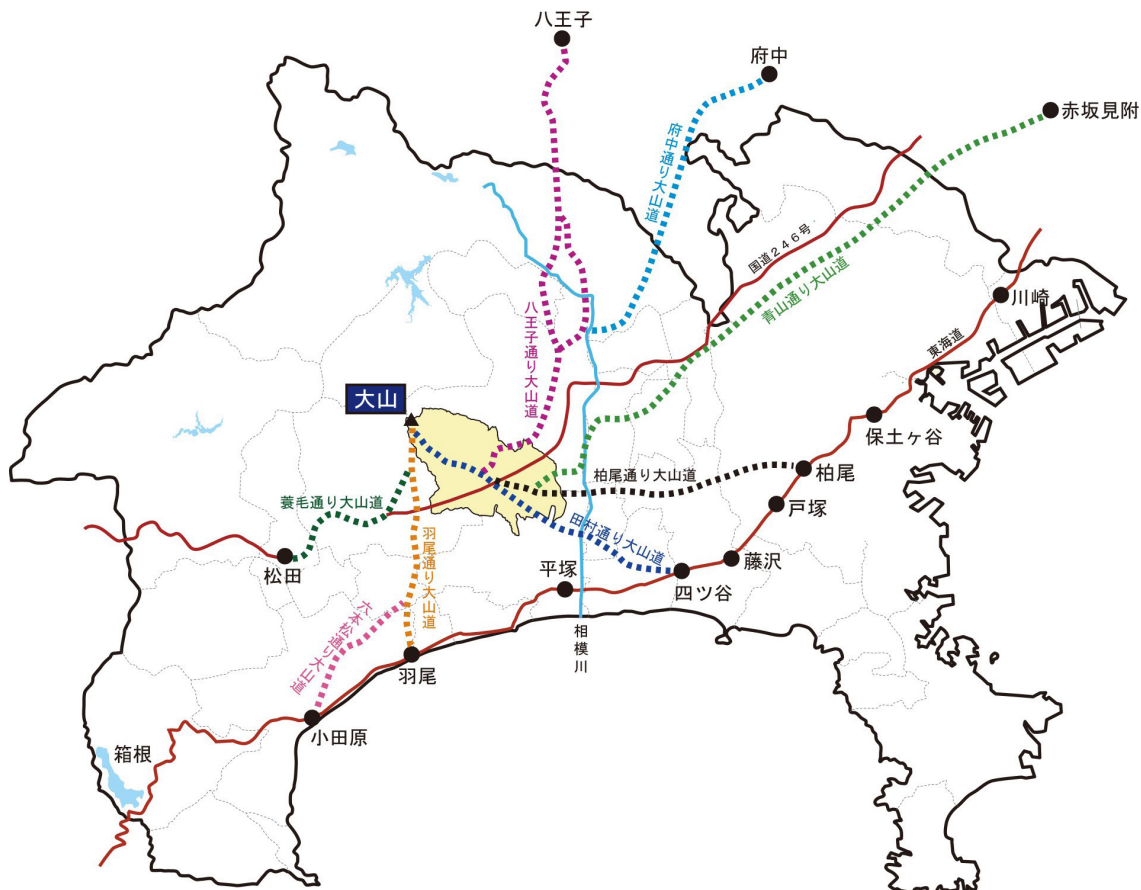


図 15 大山参詣の道、「大山道」の広がり

一円から大山に向かう参詣の道は大山道と呼ばれ、道沿いには道標や灯籠が建てられ、江戸の町人層に人気を博した大山詣りは、歌舞伎や芝居、落語、川柳等のほか、浮世絵にも取り上げられ、庶民の憧れの旅であったことがうかがえます。大山講の檀家は、関東に加え、福島、新潟、長野、静岡へ及び、明治初期の記録では、100万件もの檀家があったとされています。

大山詣りは、大山寺と御師だけではなく、周辺の関係者を巻き込む地域の一大産業であり、その経済効果は莫大であったと考えられます。



写真 90 浮世絵『大山良弁図』

2 地域的な特徴

(1) 大山地区

大山詣りを中心とした有形、無形の文化財が色濃く残されているのが大山地区です。大山へ向かうと、大山と子易を分ける三の鳥居付近から、雰囲気が変わってきます。街道沿いには、先導師旅館が建ち並び、奉納された玉垣や記念碑、手水、講を迎える板招き、石段と軒を連ねる土産物屋、そしてケーブルカーは、一般的なハイキングの山とは異なる大山独特の雰囲気を醸し出しています。

大山阿夫利神社では、江戸時代から続く能狂言、明治時代に伝授された倭舞、巫子舞等、神事に演じられる無形の文化財をはじめ、例大祭、薪能等の祭礼も行われています。このように、大山地区の文化財は現在でも使用され、毎年訪れる大山講の一行を出迎えています。過去の文化財ではなく、江戸時代から続く大山詣りを今でも体験できることが特徴となっています。

もうひとつの拠点である大山寺では、大山詣りもちろんですが、それ以前の中世の大山信仰を目にすることができます。平安時代、鎌倉時代の仏像は、大山信仰の時間的厚みを物語る文化財です。

(2) 日向地区

日向地区も3つの寺院を中心とした信仰の歴史を特徴としています。浄発願寺は江戸時代に、木食遊行の開祖弾誓上人により開かれた天台宗の寺院で、徳川家康から山林十六万五千坪を寄進され、尾張徳川家からも庇護を受けました。罪人の駆け込み寺としても有名です。最も奥に位置する石雲寺は、奈良時代の創建と伝えられ、南北朝時代の石塔、戦国時代の印判状等中世の文化財が伝え



写真 91 玉垣と記念碑



写真 92 浄発願寺本堂

られています。最も手前に位置する宝城坊は、江戸時代以前の名を日向山靈山寺とする古刹で、奈良時代の創建、平安時代、鎌倉時代、南北朝時代の文化財を多く所有しており、国指定重要文化財12件という数は、ひとつの寺としては稀有な存在といえます。靈山寺を参拝した源頼朝、北条政子らの伝説は日向地区のあちこちにあり、のどかな里山の風景の中にも歴史の重みを感じることができます。

(3) 比々多地区

比々多地区は相模国三ノ宮である比々多神社を中心とするエリアです。延喜式内社である三之宮比々多神社は、奈良時代には成立していたと考えられ、平安時代作とされる木造のこま犬（市指定文化財）の存在も当社の歴史を物語っています。この比々多地区には、古墳時代後期の古墳が多数所在し、そこから豪華な副葬品が出土していることで知られています。中でも登尾山古墳、埴免古墳は最高権力者の持ち物とされる装飾大刀や金銅装の馬具、銅碗、銅鏡等が納められていました。また、それ以前の弥生時代、縄文時代、旧石器時代の遺跡も多数見つかり、当時の生活環境が良かった本市の中でも、とりわけ好条件であったと考えられます。そうした自然環境は現在でも受け継がれ、田畑と果樹が実る田園風景が残されています。



写真 93 三之宮比々多神社



図 16 伊勢原市域における文化財の集中地区

3 テーマによる文化財のまとめ

(1) テーマ別の文化財群

第3章の「歴史的まとめとしての文化財」では、所在地、所有者による文化財のまとめを紹介しましたが、そうした文化財群含む多くの文化財をテーマでつないでいくと、そこにストーリーを見ることができます。テーマにより文化財の組み合わせは何通りも想定でき、いくつものストーリーを描くことが可能となります。

例えば、雨岳ガイドの会をはじめとする市民団体では、地域の様々な文化財を巡るガイドコースを設定し、それぞれをストーリーで結び、資料を作成したうえで、解説をしながら参加者を案内する「文化財ウォーク」を開催しています。こうした活動が、地域の歴史文化の新しい一面の発見につながり、その価値を認識し、地域の資産として共有化されることにつながると考えます。

次に、本市の歴史文化を語る代表的なテーマを挙げ、該当する文化財を列挙します。また、日本遺産の認定を受けた「大山詣り」も、そうした文化財群をテーマにより結び付けたストーリーのひとつと位置付けられます（それぞれの文化財の位置については、図16、巻末の位置図を参照）。

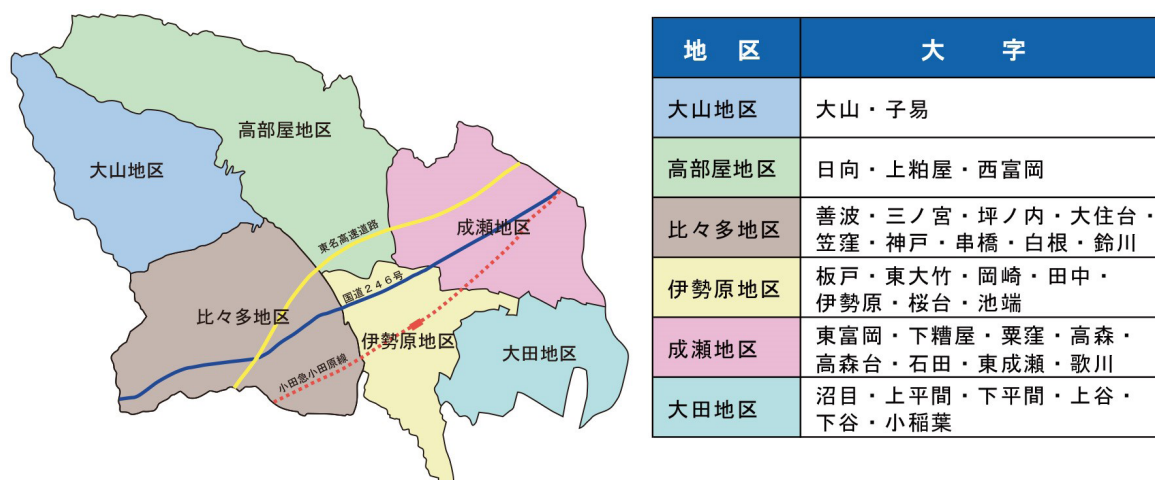


図17 伊勢原市域の地区割りと大字の名称

表 22 伊勢原地域のテーマ別文化財群

No.	テーマとストーリー	関連地区	主な構成要素	
			文化財	人物
1	<p>いせはらの古墳文化</p> <p>古墳時代後期、市内の大山を望む丘陵地には多くの古墳が築かれた。その中でも三ノ宮に所在する古墳からは、金銅装の大刀や馬具、銅碗や銅鏡等、県内一の豪華な副葬品が出土している。当時のステータスシンボルとともに、地域の最高権力者を葬る墓域として、三ノ宮が選ばれた。このことが、大山の山裾に古墳が集中することとなった要因と考えられる。</p> <p>大山は当地を治める人々にとっても、神聖な山として意識されていたのである。</p>	大山 高部屋 比々多 成瀬	<p>[市指定文化財]</p> <p>環頭大刀柄頭、登尾山古墳・埴免古墳・尾根山古墳の出土品</p> <p>[未指定文化財]</p> <p>小金塚古墳、石田車塚古墳、登尾山古墳、埴免古墳、尾根山古墳、御領ヶ原古墳、鎧塚古墳、洗水古墳、渋田古墳、赤坂古墳、下尾崎横穴墓群・上栗原横穴墓群及び出土品、比々多神社</p>	
2	<p>霊山大山の成立とその信仰 [日本遺産]</p> <p>奈良時代以降、大山とその周辺には、霊山寺、石雲寺、大山寺、さらに、比々多神社、高部屋神社、阿夫利神社等の延喜式内社が次々と創建された。霊山寺や大山寺には、国・県の指定となった多くの仏像が納められ、古社にも永い歴史を物語る数々の文化財が伝えられている。また、神聖な儀礼、祭、そして豊かな森に囲まれた景観は、今なお、私たちに悠久の時の重なりを感じさせる。</p> <p>聖なる大山が霊場としての形を整え、人々の信仰を集めていく姿ができあがったと言える。</p>	大山 高部屋 比々多 成瀬	<p>[国指定重要文化財]</p> <p>鉄造不動明王及び二童子像（大山寺）、木造薬師如来両脇侍像、木造薬師如来坐像、木造阿弥陀如来坐像、木造日光・月光菩薩立像、木造四天王立像、木造十二神将立像、銅鐘、旧本堂内厨子、宝城坊本堂（以上、宝城坊）、八幡台遺跡</p> <p>[県指定重要文化財]</p> <p>木造不動明王坐像（大山寺）、木造十二神将立像、錦幡・唐櫃（以上、宝城坊）</p> <p>[市指定文化財]</p> <p>釈迦涅槃像（茶湯寺）、伝妙沢不動尊版木、宝城坊の鐘堂、金剛力士像、宝城坊境内（以上、宝城坊）、日向淵ノ上石造五層塔（石雲寺）、浄苑願寺奥ノ院、浄苑願寺縁起絵巻、浄業寺跡</p> <p>[未指定文化財]</p> <p>宝城坊、石雲寺、大山寺、大山阿夫利神社、比々多神社、高部屋神社、大山山頂遺跡</p>	良弁、行基、相模、願行、足利基氏、手中明王太郎、徳川家康、徳川家光、徳川綱吉、徳川吉宗、春日局
3	<p>鎌倉幕府を支えたいせはらの武士たち</p> <p>伊勢原には、鎌倉幕府の御家人である糟屋有季、石田為久、岡崎義実等の武将が館を構えていた。彼らは源平の合戦から鎌倉幕府の創建に至る動乱において、数々の戦功を挙げ、幕府の重臣となっていく。</p> <p>近年の発掘調査では、市域で同時代の館や寺院の跡等が発見され、当地と鎌倉が予想以上に強く結びついていたことが明らかになりつつある。頼朝、政子が、大山寺に寄進し、霊山寺に参詣したことも、そうした関係を裏付けるものである。</p>	大山 高部屋 比々多 伊勢原 成瀬	<p>[国指定重要文化財]</p> <p>木造薬師如来坐像、木造日光・月光菩薩立像、木造阿弥陀如来坐像、木造四天王立像等（以上、宝城坊）</p> <p>[市指定文化財]</p> <p>串橋中世石塔群〔(伝)善波太郎の墓〕、岡崎城跡、浄業寺跡</p> <p>[未指定文化財]</p> <p>糟屋一族の墓、極楽寺跡、三島神社、三島神社縁起、丸山城、高部屋神社、岡崎四郎義実の墓、石田城、円光院</p>	源頼朝、北条政子、糟屋有季、石田為久、岡崎義実、真田与一、吾嬬、善波太郎

No.	テーマとストーリー	関連地区	主な構成要素	
			文化財	人物
4	<p>戦国武将の先駆け、文武両道の鏡、太田道灌</p> <p>関東管領家、扇谷上杉氏の家宰であった太田道灌が活躍したのは、室町幕府と鎌倉公方が争い、さらに古河公方や堀越公方等の政治勢力が乱立し、権力闘争を繰り返す激動の世であった。道灌は武将として抜群の強さを誇り、関東一円で負けなしという戦功を挙げながら、それが仇となって主君に討たれた悲運の武将として知られる。</p> <p>市内には縁の寺院、墓のほか、交流のあった心敬、万里集九等の文人の史跡も残され、文武両道の鏡、太田道灌の足跡を辿ることができる。</p>	高部屋比々多成瀬	<p>[市指定文化財]</p> <p>実蔭原古戦場、太田道灌の墓（洞昌院）、太田道灌画像、太田道灌の墓、木造聖観音坐像（以上、大慈寺）、上杉館址、浄業寺跡</p> <p>[未指定文化財]</p> <p>七つ塚、五霊神社、太田道灌の類当（宝城坊）、丸山城、高部屋神社大乘五部経、雅楽面</p>	太田道灌、太田道真、上杉定正、上杉顕定、足利成氏、長尾景春、万里集九、心敬、宗祇、三浦同寸、伊勢宗瑞、北条幻庵
5	<p>江戸庶民の信仰と行楽「大山詣り」 [日本遺産]</p> <p>徳川家康により武力を排除され、生まれ変わった大山は、山伏から転じた御師の活躍により、その信仰を広げていく。経済的な余裕を得た江戸の町人や関東一円の農民たちの間では、講を組織し、大山へ参詣することが大流行となる。巨大な木太刀を奉納する納め太刀や瀧垢離、江ノ島や鎌倉と絡めた名所巡り等、信仰と行楽を兼ね備えた旅は、歌舞伎や落語、浮世絵にも取り上げられ、江戸庶民の憧れとなった。江戸の人口が100万人の頃、年間20万人もの参拝者が訪れるに至った。</p> <p>地域にとって大山の盛況は、経済的、政治的、文化的にも大きな影響があり、以後も地域の発展の基盤となっていく。</p>	大山高部屋比々多伊勢原成瀬大田	<p>[国指定重要文化財]</p> <p>鉄造不動明王及び二童子像（大山寺）</p> <p>[県指定重要文化財]</p> <p>大山阿夫利神社の倭舞及び巫子舞、木造不動明王坐像（大山寺）</p> <p>[市指定文化財]</p> <p>大山八段滝、大山能狂言（大山阿夫利神社）、釈迦涅槃像、大山こま製作技術</p> <p>[市登録文化財]</p> <p>大山灯籠行事、大山道の道標</p> <p>[未指定文化財]</p> <p>大山寺、大山阿夫利神社、涅槃寺、大山道、納め太刀、元滝、良弁滝、愛宕滝、大滝、宿坊、豆腐料理、大山こま、浮世絵、古典落語「大山詣り」</p>	源頼朝、徳川家康、徳川家光、徳川綱吉、徳川吉宗、春日局、葛飾北斎、歌川広重、歌川豊国、歌川国芳、豊原国周、五雲亭貞秀、手中明王太郎

(2) 日本遺産「大山詣り」

本市の歴史文化において、時代的な特徴と地域的な特徴の両者が交差するテーマのひとつが「大山詣り」です。「大山詣り」は、江戸時代に発祥し、形を変えながらも、今なお続いています。また、大山を最終目的地としますが、その広がりや、市域全域から市外、関東一円へと大きく広がっています。伊勢原を代表する歴史文化とすることができます。本市にとって、地域に所在する多くの文化財をつなぐことができる重要なテーマと評価できます。

このテーマを語るストーリーが、平成28年、日本遺産に認定されました。このことは、文化財をまちづくりに生かしていく上でも、重要な変換点であったと考えられます。歴史的背景を有する庶民の信仰と、旅という行楽、その人気を当時の様々なメディアを駆使して高め、地域の産業として発展させてきた姿は、まさに現在の観光業に通じるものがあります。以下が、平成28年度に認定された日本遺産のストーリーです。

ア タイトル

江戸庶民の信仰と行楽の地 ～巨大な木太刀を担いで「大山詣り」～

イ ストーリーの概要

大山詣りは、鳶などの職人たちが巨大な木太刀を江戸から担いで運び、滝で身を清めてから奉納と山頂を目指すといった、他に例をみない庶民参拝である。そうした姿は歌舞伎や浮世絵にとりあげられ、また手形が不要な小旅行であったことから人々の興味関心を引き起こし、江戸の人口が100万人の頃、年間20万人もの参拝者が訪れた。

大山詣りは、今も先導師たちにより脈々と引き継がれている。首都近郊に残る豊かな自然とふれあいながら歴史を巡り、山頂から眼下に広がる景色を目にしたとき、大山にあこがれた先人の思いと満足を体感できる。

ウ ストーリー

大山への信仰は古く、奈良時代には、靈山寺（現・宝城坊。通称・日向薬師）、石雲寺、大山寺が開かれ、平安時代にまとめられた「延喜式神名帳」に記される阿夫利神社や比々多神社、高部屋神社の成立などにより、信仰の地としての姿



が整えられていった。大山は別名を「雨降山」と呼ばれるなど、雨乞い、五穀豊穰、商売繁盛を願う多くの庶民が「大山詣り」に訪れた。しかしながら、人々を惹き付けたのは神仏の御利益だけではなかった。

1. 大山詣りを仕掛けた御師の生い立ち

戦国時代末期の天正18年（1590年）、豊臣秀吉の軍勢により北条氏が滅ぼされた戦いにおいて、大山の修験者たちは武装し北条氏と共にいた。その後、江戸近郊に僧兵の武装勢力があることに危機感を持った徳川家康は、大山を純粋な信仰の地とするため山内改革を行い、寺領を寄進し経済的な支援をする一方で、修験者や妻帯している僧侶たちを大山寺から追放した。

家康に下山を命じられた者たちはその信仰心を断ち切らず、生き残り策として中腹で神殿を備えた宿坊を営む御師となった。御師たちは、宿坊や土産物屋を営みながら、年に100日以上にわたり関東一円の檀家を廻って御札を配り、初穂を集め、大山寺に祀られる「不動明王」と山頂に祀られる「石尊大権現」の靈験を広める地道な布教活動に励んだ。

2. 信仰と行楽を兼ね備えた大山詣り

(1) 庶民の遠出を叶えた大山講おおやまこう

大山は、関東一円どこからその神秘的な容姿を望むことができ、江戸方面からは富士山とともに眺めることができる。当時、富士詣りも人気があったが、富士へ行くには少なくとも7日を要し、箱根の関所を通る手形が必要な大旅行であった。一方、大山詣りは、関所も通らず、帰りがけに江ノ島や金沢八景を経由しても3日か4日程度といった観光を兼ねた小旅行であった。

しかしながら、いかに江戸から近い大山詣りとはいえ、1人での参拝となると費用の工面は困難であった。そうしたことから、同じ職種の職人同士や今でいう町内会を単位とする大山詣りを目的とした講こうを組織し、費用をみんなで積立て順番制で大山に向かうといった仕組みを作り上げた。御師たちの熱心な布教もあり、関東一円をはじめ静岡、山梨、長野、新潟、福島に広がり、最盛期には100万戸を超える檀家があった。

こうして、江戸から距離的に近い利便性と大山の歴史的由緒を生かし、霊験あらたかでありながらも、厳しい修行や戒律を伴わない、気軽な信仰と行楽を兼ね備えたものとして大山詣りはできあがっていった。

(2) 納め太刀を担ぎ「いざ！大山へ」

関東一円から大山へと続く道は「大山道おおやまみち」と呼ばれ、江戸を出立した参拝者たちは相模湾を左手にして、はるか向こうの富士山が背後に見える大山を目ざし、要所にたてられた石造りの道標どうひょうをたどりながら楽しげに歩を進めた。大山講の一行、いわゆる講中こうじゆうが江戸から肩に担いで運んだ巨大な木太刀は、源頼朝が武運長久ぶうちゆうきゆうを祈願して自分の刀を大山寺に奉納したとされることに由来し、参拝に際して奉納する納め太刀である。庶民による参拝では他に例をみない、唯一大山詣りで行われたものである。

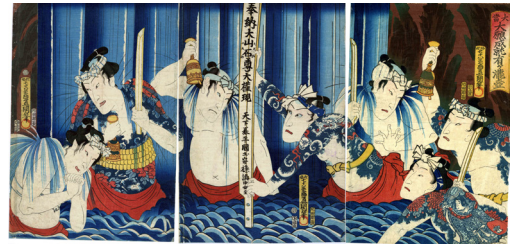
幅広い人々に親しまれた大山であったが、日頃高い所での仕事が多く、遠くに見える大山に特別な感情を抱いていた鳶や大工、火消しといった職人たちでつくる講も多くあった。こうした職人たちは水や石への縁起を担ぎ、「雨降山」の名や山頂の「石尊大権現」にあやかって御利益を求め参拝に訪れ、粹にこだわりを持つ講中同士が競い合ううちに納め太刀も徐々に大きくなり、7メートルに及ぶものも奉納されている。また、参拝者の中には、ばくちに負けて借金取りから逃げるように大山詣りをした者もいた。納め太刀には、五穀豊穰、商売繁盛などの願いとともに庶民の武運長久とも言える勝負運を上げる意味も込められていた。

(3) 歌舞伎や浮世絵の題材となった大山詣り

参拝者たちは中腹にある滝に打たれ身を



清める滝垢離たきごりをしてから登拝する。粋な職人たちにとっての滝垢離は、互いに彫りものを披露し合う大山詣りならではの舞台でもあった。



こうした姿をはじめとして大山詣りに多くの人々が関心を寄せていたことから、歌舞伎や浄瑠璃、落語、川柳などに取り上げられ、

また、参拝者たちが大山に向かう道中の様子や、歌舞伎役者がふんする彫りもの姿で大きな納め太刀を手にして滝に打たれる姿などを描いた浮世絵が売出されたこともあり、更に多くの人々の興味や関心を呼び起こし、江戸の人口が100万人であった頃、年間20万人もの参拝者が大山を訪れている。



(4) 参拝客をもてなす宿坊と麓の繁栄

参拝の講中を歓待する宿坊は、講の所在地とその名称が刻まれた玉垣たまがきに囲まれ、玄関先に並ぶ登拝記念の石碑や奉納された手水鉢ちようずばち、講の名を刻み込んだ板まねきや布に染め抜いた布まねきが御師とのつながりの強さを表し、帰宅した家族さながら講中を出迎える。

御師たちは、参拝客の宿泊から登拝の道案内まで一切の世話をし、宿坊に備える阿夫利神社の分霊を祀る神殿で、登拝する講中の無事を祈願した。

大山の名物となっている豆腐料理は、各地の講から奉納された大豆を利用し地元の清水でつくったのが始まりで、宿坊ごとにそれぞれの講から預かる専用の器を用いて振る舞われた。また、地域の木地師きじしにより作られた大山こまは、金回りが良くなるという縁起物で、参拝客が帰宅の際に買い求め、誰からも喜ばれることから、御師も檀家廻りの際に土産代わりに持参していた。

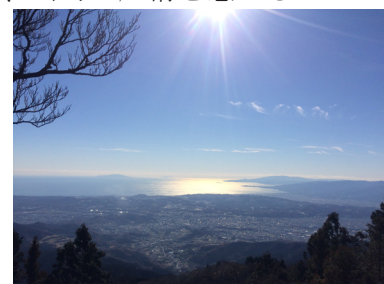
大山の麓も大山詣りの恩恵にあずかり、往来する参拝者を相手とする商いはもとより、宿坊で必要となる布団や履物から日用品、酒や食料品などの取引で繁盛した。

3. 今に息づく庶民信仰と神秘的な魅力

大山詣りは先導師せんどうし(当地では明治の神仏分離を契機に御師を改称)により脈々と引き継がれ、今も先導師の道案内で登拝する白装束に身を包んだ大山講の一行や古くから伝わる様々な祭事を目の当たりにすることができる。

宿坊や参道沿いに軒を連ねる茶店や土産物店では、当時の風情を感じる事ができ、もともと精進料理であった豆腐料理や猪、山菜といった地元の食材を使った食事を楽しむ。

首都近郊に残る豊かな自然とふれあいながら歴史を巡り、山頂から眼下に広がる雄大な景色を目にしたとき、大山にあこがれた先人たちの思いと満足を体感できる。



4 歴史文化の特徴のまとめ

伊勢原市の歴史文化について、そのキーワードは「大山」です。それぞれの時代について、大山が深く関係しています。それは、単なる地形条件のひとつということではなく、大山を仰ぎ見ながら暮らす人々にとっての心的情景となり、それが歴史的に継承されてきたと考えられます。このことは、令和元年度の市民意識調査で、未来の伊勢原市のキャッチフレーズにふさわしい言葉として、約半数の市民が「自然」を選んでおり、現在の伊勢原市民にも共感されていると考えられます。伊勢原はいつの世も、大山とともに生きてきたと言うことができそうです。

市内の文化財が豊富な三つの地区は、それぞれ中心となる時代が異なることが特徴です。古代は比々多地区、中世は日向地区、そして近世、江戸時代は大山地区となります。そして明治時代以降は次第に現在の市街地である伊勢原地区が中心となっていきます。このように、文化財から見た歴史文化のあり方からも、伊勢原の成り立ちを追うことができます。

また、多くの文化財が、大名や貴族、豪商等ではなく、社寺などの組織を中心として伝えられてきたことも特徴のひとつです。社寺は信仰でつながる人々の集まりですが、実際は地域の人々の力に支えられて存続しています。伝えられてきた文化財についても、地域で暮らす多くの人々の手によって守られてきたと考えられます。こうした地域の人々のつながりが伊勢原市の歴史文化を継承してきたと言えます。